

青森県の民選知事 ②

山崎岩男・知事 (1956 ～ 1963 年)

藤本 一美

目 次

1. はじめに
2. 出生・学生・教員
 - ① 出生
 - ② 学生
 - ③ 教員
3. 大湊町長・県会議員
 - ① 大湊町長
 - ② 県会議員
4. 衆議院議員
 - ① 一期目
 - ② 二期目
 - ③ 三期目
 - ④ 四期目
 - ⑤ 五期目
5. 県知事時代の成果と課題
 - ① 知事当選
 - ② 知事再選
 - ③ 知事辞任
 - ④ 地方財政再建促進特別措置法
 - ⑤ むつ製鉄問題
 - ⑥ 工専誘致合戦
 - ⑦ 県議選挙区問題
6. おわりに — 「政治家」山崎岩男とその評価

1. はじめに

山崎岩男は 1901（明治 34）年 1 月 9 日、北海道久遠村（現大成町）の漁師の家に生まれた。父と母はともに青森県生まれである。山崎は 1915（大正 4）年、父の郷里である八戸市に舞い戻り、八戸中学に入学するが、ストライキ騒動の責任者として、退学処分を受けた。その後上京して、中央大学の予科に入学、大学在学中は箱根駅伝の走者として活躍した。山崎は在学中に、イマ夫人と結婚、竜男（参議院議員・環境庁長官）が生まれている。

山崎は 1926（大正 15）年 3 月、中央大学法学部を卒業、青森市にある県立青森商業高校の英語兼民法担当の教師として赴任した。1932（昭和 7）年 2 月、大学の先輩である梅村大・弁護士が衆議院議員に立候補、その応援のため教職を辞した。その後、大湊町の助役に就任、1933（昭和 8）年、町議会で町長に選出される。そして、1935（昭和 10）年 9 月、青森県会議員に立候補するが次点で落選、また大湊町長に戻り、1939（昭和 14）年 9 月、再び県議に挑戦して最高点で当選を果たした。なお、1942（昭和 17）年 4 月、山崎は衆議院議員に立候補しているが、落選している（『青森県人名事典』〔東奥日報社、2002 年〕、705～706 頁）。

山崎は戦後、1946 年 4 月、衆議院議員・総選挙に立候補して当選、それ以降、1953（昭和 28）年まで連続五回当選を果たした。だが、

1955（昭和30）年2月の衆議院議員・総選挙では、落選の憂き目を見た。そこで、翌1956（昭和31）年7月の知事選で無所属から出馬して当選、また1960（昭和35）年にも再選された。

山崎は知事在職中、“人間機関車”とか“マラソン知事”と称され、県財政の再建、県庁舎の新築、東北開発三法の具体化、および高校急増対策などで多くの功績を残し、山崎知事の積極的な政治活動は、多くの県民の注目を集めるところとなった。しかし、1962年3月、県議会において胃潰瘍で倒れ、翌1963年（昭和38）年3月、山崎は知事職を辞任、1964（昭和39）年11月23日に死去した。享年63歳であった（『東奥日報』1964年11月23日〔夕〕）。

6年6ヵ月に及んだ県知事時代、山崎は一貫して青森県の後進性脱却に尽力、特に下北半島の開発に努め、むつ製鉄の創設を意図したものの、企業の撤退で空中分解した。またビート作付けを普及させてフジ製糖を誘致した。山崎の政策は総花的だと批判もある一方で、本県の第二次産業開発の端緒を開くなど、県の発展のために尽くした功績は極めて大である（山崎竜男「父を偲ぶ」『山崎岩男伝〔マラソン知事追想記〕』〔山崎岩男伝刊行委員会、1980年〕、126-127頁、以下、『山崎伝』と略す、前掲書『青森県人名事典』、706頁）。

本稿の目的は、山崎岩男の知事時代の政治的活動を描くことである。ただ、「政治家」山崎の実態を知るために、知事に就任する以前の活動にもかなりの頁を割いている。そこで論述は、最初に、山崎岩男の出生、学生時代、教員時代を簡単に紹介、次いで、大湊町長時代、県議会議員時代に触れる。その上で、五期に及んだ衆議院議員時代に言及、最後に、二期にわたって務めた知事時代の成果と課題を検討し、できる限り「政治家」山崎の実像に迫ってみたい。

2. 出生・学生・教員

① 出生

山崎は1901年1月9日、高橋虎次郎と山崎ハルの末子として生まれ、山崎には三人の兄と姉一人がいた。父親の高橋虎次郎は、八戸市の大きな酒屋に生まれたが、18歳の時、北海道で一旗揚げするために奔放して漁師となり、久遠村ではコンニャク業も営んでいた。虎次郎は本籍地を捨てて行方不明の状態であったので、母親の山崎ハルと結婚しても、入籍することがかなわず、ハルの私生児として戸籍に残された。だから、山崎という姓は母方の姓ということになる。山崎は初代民選知事の津島文治とは違って、漁師の末っ子として極しい家庭で育ったのである。山崎はまた、幼少の頃三歳にして、広福寺に奉公に出されている（前掲書『山崎伝』、110～111頁）。

② 学生

山崎は1915年（大正4）年、久遠村で小学校高等科2年を終了後、中学校に通うため父の郷里の八戸市に戻り、八戸中学に入学した。家が貧しかったので山崎は苦学して学校に通った。しかし、成績はよく一貫して級長を務めている。そこ頃から、山崎はマラソンが強かったという。だが、1920（大正9）年、中学5年生の時、級長としてストライキに加担、そのため退学処分を受けた。

そこで山崎は、1919（大正9）年9月、中央大学予科に入学、本科に進んでからはもっぱら箱根駅伝の走者として活躍、常に往路を走り、中央大学の連続優勝に貢献した。また、弁論部の部長も務めた。山崎は大学生時代、郷里の親類であったイマと結婚、生活費を稼ぐため、東京府下平村にある万年小学校の夜間部代用教員となっている（『山崎伝』、114頁、『風雪の人脈 第一部・政界編』〔青森県コロニー協会出版、1983年〕、

77頁）。

③ 教員

山崎はその後、1926（大正15）年、中央大学法学部を無事に卒業して、青森市の県立青森商業高校の英語および民法の教師として赴任する。その際、課外活動として弁論部を立ち上げるとともに、陸上競技部ではマラソン選手の育成に努めた。

商業高校時代の山崎についてエピソードを一つ披露しておく、山崎の教え子の一人で後に青森市議会の議長を務めた三上辰蔵は、次のように述懐している。「山崎先生の担当科目は法律であり、民法科目が印象に残っている。先生は授業の初めの30分ほどは教科書に書かれていることについて話したが、だんだん世間話となり、話しているうちに熱を帯び、まさに口角飛沫を飛ばし雄弁家となる。……非常に話が面白く、元気旺盛で、テーブルをしばしば叩いての講義であり、熱血漢という感じだった。しかし元気はよいが決して荒っぽくはなく生徒に対して体罰を加えることはなかった」（前掲書『山崎伝』、55-56頁）。

この当時の子弟関係は極めて強固なものであって、山崎はタンクといわれた五尺の体で情熱を込めて学生の面倒を見た。それが、後年強力な選挙母体となっている。実際、山崎教師は、ストライキで放校となった生徒の救済や喧嘩の仲裁など、結構生徒たち面倒をみて慕われていた、という（同上、114頁）。

山崎は、青森商業高校在職6年目の1932年（昭和7）年2月に、教師を退職する。理由は、大学の先輩で青森市出身の弁護士・梅村大が衆議院議員選に出馬するので、その応援演説を引き受けるためだった。この時、教師を辞して選挙運動で応援演説をしたことが、後に山崎が政界へ乗り出す契機ともなった（前掲書『風雪の人脈 第一部・政界編』、77～78頁）。

3. 大湊町長・県会議員

① 大湊町長

山崎は教員を辞めた4ヵ月後の6月、下北郡大湊町の大田直蔵・町長に口説かれて助役に招請された。次いで、翌年1933（昭和8）年1月には、町議会で町長に選任される。山崎、若干32歳の時であった。

当時の大湊は海軍基地であり、要港部をはじめ多くの施設が造られ、下北はもとより県内で最も重要な町の一つであった。山崎は町長着任早々の11月1日、城ヶ沢に海軍の航空隊を新設、次いで、二つの部落を移転させて船溜りを築造、県下164ヵ町村のトップを切って、都市計画による道路舗装を行い、軍港としての機能を倍増するなど、町の事業に当時としては破格の5万1千円の起債を行った。また、海軍軍用機「報国青森号」も献納した。さらに、山崎は町長時代に大病を患い、海軍病院に入院したが、その後尽力して、海軍病院を一般町民にも開放することにした。こうして、山崎は当時の海軍首脳から絶大な信頼を得ると同時に、海軍との相互信頼と友情関係を構築した。山崎は既然大湊町長時代に、大きな政治力を発揮していたのであり、それが政治の世界に足をつっ込む契機になった（前掲書『山崎伝』、116頁）。

しかし、山崎町長は1934年5月、町議会議員7名の連名で不信任・辞職勧告を突きつけられる。その理由は、海軍航空隊の砂利採取事業を町長独断で行い、3千円の利益を上げ、その資金で警部補派出所を新築したのがけしからん、というものだった。利権に参画できなかった土木業者が、背後に存在した。この事件は町長側の勝利に終わったが、山崎はこの件もあって、9月1日に町長一期途中の3年にして辞職する（同上、117頁）。

② 県会議員

次に山崎は、同年9月25日、青森市から県会議員選挙に立候補した。選挙戦では、青森商業の卒業生が無報酬で手伝ってくれたものの、資金不足から有権者へのはがき5千枚を出すこともできず、言論一本の戦いを強いられた。山崎は1,778票獲得したが、208票差で善戦むなしく次点で落選する（同上、118頁）。

山崎は1935年12月、再び大湊町長に当選、次の機会を待った。山崎はこの間に、軍需工場である青森銅板加工、青森印刷などの会社を創設、自から社長になって準備万端、1939年9月、県議選に挑戦、2,269票と最高得票を得て、晴れて県会議員となった。山崎34歳の時である。所属政党は、政友会中島派であった。

そして、1942（昭和17年）4月、いわゆる“翼賛選挙”といわれた衆議院議員・総選挙が実施され、山崎も海軍の後押しで出馬した。だが、陸軍が後押しする先輩梅村の長男梅村一も出馬、喧嘩両成敗の形で両者とも推薦がとれなかった。翼賛推薦を得るのには失敗し、山崎は5,545票を獲得し次点の第二位に甘んじた。ただ、運のよいことに山崎はこのため、戦後、公職追放を免れている。翼賛選挙では、非推薦とはいえ、衆院選初陣で5千余票を得た山崎の存在は、政治家の“成長株”として、その時すでに県政界から注目の的になっていた（同上、147頁）。

4. 衆議院議員

① 一期目

第二次世界大戦後の1946年4月10日、第一回の衆議院議員・総選挙が実施され、この選挙では選挙区が全県一区となり、投票は二名連記であった。青森県の場合、定員は7名、これに38名が名乗りを挙げた。山崎も当然立候補して、

3万7,674票を獲得、第四位で当選した。上位当選者のなかで、二人は61歳と60歳のロートルであった。だが、山崎は45歳の若さを誇り、「政治生命の先の長さ」と強力な馬力の点で将来最も期待された」政治家の一人であった。なお、今回の総選挙では、後に知事となり、山崎を支援する津島文治も衆議院議員に当選しており、政治家としての両人のスタートは一緒である（藤本一美「青森県の民選知事① 津島文治・知事（1947～1956年）」『専修大学社会科学年報、第49号』〔専修大学・社会科学研究所、2015年3月〕、221～271頁、『山崎伝』、151頁、同じく当選した者の中で、津島文治は49歳、大沢久明は44歳であった）。

② 二期目

1947年4月25日、前年に選挙が行われてから僅か1年で、衆議院議員・総選挙が行われることになる。今回から公職選挙法が改正され、全県二区とした中選挙区単記制に戻った。山崎は、前回の全県一区の選挙では好成績で当選したが、それは二名連記制ということもあり、地盤は極めて不安定で、しかもその前の翼賛選挙では落選していた。だから、今回の総選挙が衆議院議員になる本格的スタートである、と考えた。山崎は第二区から出馬した。だがそこは、南部政界のドンである小笠原八十美の地盤であった。

山崎の主たる地盤は、6年間教師をつとめ、二回県議選に出馬し、県会議員として活動した青森市が中心で、その周辺の町村を加えた“東青地区”である。それに、大湊町長時代の同町周辺の下北郡に根強い支持者がいた。さらに父の出生地で、夫人イマの郷里八戸市にもかなりの支持者がおり、この三地域の得票如何が、山崎の政治生命の鍵を握っていた。一般に、選挙には地盤、看板、および鞆（カバン）の3パンが必要だといわれる。実は、この点で山崎は“地盤”に恵まれていた。母方の祖母の出身も西郡だそうで、全県いたるところに選挙の拠点

があるようなものだった（松岡孝一『一地方記者の記録～東奥日報とともに半世紀～』〔東奥日報社、2000年〕、250頁、前掲書『山崎伝』、161頁）。

開票の結果、山崎は4万8,515票を獲得して、大物政治家の小笠原八十美に次いで第二位で当選した。小笠原との票差はわずかに649票差であり、三位の苫米地義三には2万票近くの大差をつけての当選であった。この総選挙により、山崎の地盤はかたまり、連続当選を可能にする強力な基礎を確立した、といえる。なお、この選挙では山崎は進歩党から出馬している。金権候補といわれた小笠原が長年にかけて培ってきた地盤において、“理想選挙”を掲げて山崎が肉薄したことは、小笠原陣営にとって大きな脅威であった（前掲書『山崎伝』、168頁）。

③ 三期目

山崎はその後民主党に所属、運輸および交通委員会で活躍、また党内では弁論が高く評価されて党の遊説部長に就任して、全国を飛び回った。山崎の信念は、“足と舌”が健全な限り選挙では必ず勝つてであった。この間、芦田内閣の下で、山崎は厚生常任委員会の委員長も務めている。またこの当時、青森医専の弘前市へ移転話が生じていたが、これに反対したのは第一区選出議員の中では、山崎唯一人であった（同上、168～169頁）。

1949年1月23日、総選挙が実施された。山崎は3万9,322票を獲得し、小笠原、苫米地に続いて第三位で当選した。だが、山崎が所属する民主党は3月10日、全国大会で分裂し、“野党派”と“連立派”とに分かれた。山崎は犬養、保利系の連立派に属し、第二次吉田内閣では、労働政務次官に就任した。この間、山崎が格別力を入れたのが、青森鉄道管理局の誘致問題であった。ただ、これは失敗に帰し、激怒した山崎は衆議院議員の辞表を提出する決意をした、という（同上、175頁）。

④ 四期目

政界再編の結果、1950年（昭和25）年3月、民自党が「自由党」と改称して再発足、山崎もこの新しい自由党に入党した。1951年に念願の独立を達成した吉田首相は、1952（昭和27）年8月28日、衆議院を解散、10月1日に総選挙が施行された。今回は、独立に伴い多くの人々が立候補してきた。山崎にとって、今回の選挙は四回目であった。選挙区の地盤は過去三回の連続当選で確立したとはいえ、前回得票をかなりダウンさせていたし、また翼賛選挙で圧倒的強さを発揮した「追放解除組」が大挙出馬したので、山崎陣営は懸念を深めた。しかし、県都青森市に焦点を絞った選挙戦が功奏し、得票は前回の1万2千票から2万票も伸び、結局、山崎は5万7,806票を獲得して、トップで当選を果たし、第二位に1万票以上の差をつけ、しかも本県史上第一区、第二区を通じて記録的な最高得票だった。

山崎の強さは、いわば青森、下北、および八戸の三つの故郷を有していることであろう。幼少時は八戸で育ち、次いで、青森では青森商業高校で初めて社会人となり、また下北では大湊町長を務めた。この三つの地盤が最後に力を発揮したのである（木村良一『検証 戦後青森県衆議院議員選挙』〔北方新社、1989年〕、71頁）。

⑤ 五期目

吉田茂首相は、1953年（昭和28）年2月28日、衆議院予算委員会場で「バカヤロウ」と発言、これを契機に衆議院は解散され、4月19日に総選挙が行われた。この解散に驚いたのは何も野党ばかりでない、与党自由党も面食わされた。だから、山崎も必然的に守りの選挙を強いられた。しかし、山崎の選挙はかつて県議選に立候補した時から、「攻撃型の選挙」であって、四面から攻撃をかけられながら、“攻撃は最大の武器”を合言葉に戦った。その結果は、山崎は

4万6,913票を獲得して第二位で当選した。一方、確固たる不動の地位を誇ってきた小笠原八十美が次点でまさかの落選を喫した。

吉田政権が退潮ムードの中で、青森県の政界は知事の改選をめぐり、様々な動きが見られた。小笠原八十美の落選に伴い、自由党県連は組織の立て直しを図り、1954年7月14日に開催された大会で山崎は支部長に選任された。この当時、津島知事の三期目の出馬について、党内から異論が出て、自由党は分裂状態に陥った。そこで山崎は、支部長を辞任してまで、津島を積極的に応援、津島知事はみごとに三選を果たした。これが津島との政治的連携を深める契機となった（藤本一美『現代青森県の政治（上）1945年～1969年』〔志學社、2015年〕、99～100頁、『山崎伝』、202～203頁）。

吉田茂が退陣した後、鳩山一郎内閣が発足、鳩山首相は1955（昭和30）年1月24日、衆議院を解散、2月27日、総選挙が実施された。山崎はこの総選挙で、4万2,256票獲得しながらはじめて、次点第二位（最下位）で落選の憂き目を見る。全国的に自由党が退潮する中で、山崎は主力地盤である青森市において、社会党左派の淡谷悠蔵に大量得票を許し敗退した。6万4,805票でトップ当選した淡谷は青森市で2万2,637票を獲得、一方、山崎は1万7,109票に留まり、5,564票の差をつけられた。東青地区で、山崎と淡谷の票が逆転したのが痛かった。

要するに、「全国的に飛躍した社会党ブームに乗った淡谷に対して、これまた全国的に戦後最低に落ち込んだ自由党の退勢を山崎候補がモロにかぶった」のである。戦後連続して、上位当選してきた山崎にとって落選は大きなショックであったのは、いうまでもない（『東奥日報』1955年2月28日、前掲書『山崎伝』、209頁）。ちなみに、中選挙区に戻った1947年以降の山崎の総得票数、並びに青森市、東郡での得票とその割合は図表1の通りで、青森市と東郡の票が如何に重要であったのかがわかる。1955年の時には、東郡の得票が9,227票と1953年に比べて6,133票も減らしている。その理由として考えられるのは、山崎の鉄道管理局問題や下北開発に加えて、知事選での津島応援、また自由党東青支部員が大量に民主党入りし、選挙運動の手足がなくなったもの、と思われる（『陸奥新報』1955年1月1日、『東奥日報』1955年2月25日）。

以上、瑠々述べてきたように、山崎は、1946年、戦後第1回の衆議院議員・総選挙に出馬して当選したのを皮切りに1955年まで、何と五期連続当選を果たした。そして、この間に衆議院の厚生常任委員会・委員長、水害対策特別委員会・委員長、および労働政務次官などを歴任し、特に運輸常任委員としては、「津軽線」の開通に尽力した（『東奥日報』1964年11月23日〔夕〕）。

山崎の衆議院議員時代のあだ名に、国会訪問する県の陳情団の世話を奪いあうようにして走

図表1 山崎岩男の総得票、青森市、東青地区の得票、および割合

年	総得票	青森市の得票	割合（％）	東郡地区の得票	割合（％）
1947	48,515	15,199	31.3	14,860	30.6
1949	39,323	12,295	31.2	9,697	24.6
1952	57,806	20,000	34.6	18,079	31.2
1953	46,913	15,713	33.5	15,360	32.7
1955	42,256	17,109	40.4	9,227	21.8
＜平均＞	46,962	16,063	34.2	13,446	28.1

出典、『東奥日報』『青森県議会史』、割合は筆者が計算。

り回るので、“メッセンジャー・ボーイ”とか“陳情代議士”などがある。しかし山崎は、それを全く意にかえさず、「そう、その批判を甘んじて受けましょう。つまり、私は青森県の代表者なのだ。平常な努力とはそれです」と答えている。また、「私の強さ？ それは平常の努力ですよ」「地方問題解決に疾走する努力ですよ」、と記者に断言している。ちなみに、山崎は酒もタバコもやらず、麻雀、碁将棋などの“悪遊び”もしない、と述べている。真面目人間なのであろう（『東奥日報』1953年3月29日、1956年7月14日）。

5. 県知事時代の成果と課題

① 知事当選

津島知事は山崎の協力もあって、三選を果たしたものの、1956（昭和31）年5月29日、三期目の在任わずか1年半で辞任し、全く予期せぬ事態となった。津島知事の辞任を受けて、7月20日に知事選挙が行われる運びとなった。山崎は、予定していた参議院選への出馬を取りやめて、知事選への出馬を決意する。この時、党内からは山崎と平野善治郎（参議員議員）の二人が公認を申請した。自民党県連では、公認問題をめぐって、旧自由党系と旧民主党系の両派に分裂して鋭く対決、県連段階では結論を出すことが出来ず、中央本部にまで持ち込まれた。その結果、平野が公認を勝ち得た。しかし、これを不満とする山崎は無所属で出馬することになり、保守分裂の激戦が展開された。知事選への立候補者は、自民党・平野善次郎、共産党・大沢久明、および無所属・山崎岩男の三人で、選挙戦は三つ巴の戦いとなった。だが、実際には、旧自由党系の山崎前衆議院議員と、旧民主党系の平野元参議院議員による保守同士の戦いであった（藤本一美、前掲書『現代青森県の政治

（上）1945～1969年』、116頁、公認決定の経緯については、さしあたり、『青森県議会史 自昭和28年～至昭和34年』〔青森県議会、1960年〕、405～408頁を参照）。

選挙の結果は、山崎が25万0,411票、平野が18万4,761票を獲得、無所属の山崎は自民党公認の平野に6万5,650票差でもって勝利し、知事の座を手にした。地元の『東奥日報』紙は、山崎の勝因を次のように報道している。

まず、「山崎氏は地元の東青をはじめ津軽三市四郡とも平野氏を完全に押し、特に北郡では7対3と圧倒的な強みをみせ、一方、県南地区でも旧民主系の絶対勢力を誇る上北郡ではふるわなかったものの、平野氏の地元である三戸郡では予想以上に進出、下北郡でも順調に稼ぎ六市38ヵ村のうち5市町村の開票で平野氏を大きくリードし、当選を確実に握ってしまい、全開票では6万5千票の差をつけて栄冠を勝ち得た」と指摘。その上で、「もみ合った末であるが、平野氏は時めく自民党の公認となり、加えて8名の国会議員特に笹森順三氏の余勢を双肩にかけ、それに24名の県議が勢ぞろいして戦ったが、5期9ヵ年と戦後殆ど国会に席を有し県民の面倒をみた関係で名前が末端まで知られていた山崎氏と違って新規開拓の面が多く、全力を上げたにもかかわらず平野という名前が浸透しないうらみがあった。逆に山崎氏は後半に入り津島前知事が弘前に同市事務所に居を構え積極的な動きをしたことも津軽を制し勝利を飾るもとともなったようだ」、と総括した（『東奥日報』1956年7月21日）。

一方、『陸奥新報』紙は、勝因は津軽での得票であったとして、次のように報道している。「山崎氏の勝因は自民党県連支部の公認争いから早めに身を引き、出足早く運動に入ったことおよび代議士時代から名前を知られて津軽地区各市長村長の支持を得たことが大きくものをいったとみられる」（『陸奥新報』1956年7月21日）。

ここで留意しておくべきは、山崎の知事選への出馬が、必ずしも山崎本人の意思によるものではなく、津島県政の跡目相続者として津島文治、三和精一らの強力な推挙によるものだ、と見られたことである（『青森県議会史、自昭和38年～至昭和41年』〔青森県議会、1983年〕、22頁）。

実際、この年の8月29日に開催されていた、県議会第46回定例会で、社会党の佐々木秀文・議員は次のような発言して、山崎の参議院選から知事選出馬の転出を鋭く批判している。

「当選3日目の某新聞に（山崎知事は）抱負を語っていたが、その中で、津島前知事は金木の殿様だから非常に押しも威圧もきく、下から叩き上げた私はそういう職には向かない。知事はやりたくなかったが、やむを得ず立ったといっている。巷間、知事は自分の行くことは選挙運動である。何時他の選挙に転出するか判らないということをいったとの噂もある。この際知事職に対しどんな信念を持っているか伺いたい」（前掲書『青森県議会史、自昭和28年～至昭和34年』、416頁、（ ）内引用者）。

なお、今後の県政の行方については、『東奥日報』紙の「知事選挙を顧みて—本社記者座談会」の中に、次のような記事が見られるので紹介しておく。「E 今後の県政は津島、三和の色彩が強く反映するだろう。G 初めから予想されたいことだ。まず津島県政の延長だろう。A さしあたり津島法王による院政というかっこうになる」（『東奥日報』1956年7月21日〔夕〕）。

ただ、山崎が県知事に当選した1956年7月以降、1957年6月までの1ヵ年を通じて見れば、当初難航を予想されていた県政は比較的安定した状態が続き、山崎が政治生命を揺さぶられるような事態は生じなかった。何故なら、知事に就任した山崎派＝旧自由党は議会内では劣勢であったので、山崎は“自民党知事”の立場に徹し、県議会中心主義に動いたこともあり、特に

重要案件に関しては事前に与党の了解を問った上で方針を決定したので、対議会関係は津島時代よりも緩和された面があったからだ。ことに、1957年1月11日、自民党が県連大会を開催、県議会内勢力の均衡に務めた以降は、山崎知事の県政運営もスムーズなものになった。しかし、山崎知事が議会に提出する重要案件について、すべからず事前に党の了解を得るとの一礼を入れていたので、議案の“提案権”と“議決権”が混乱するという批判が自民党内で見られた（『東奥年鑑 昭和32年版』〔東奥日報社、1957年〕、30頁、前掲書『青森県議会史、自昭和38年～至昭和41年』、22頁）。

山崎は、知事として予算編成とか災害対策に追われていた。その間隙をぬって、山崎は1959年6月12日、約1ヵ月にのぼる欧米旅行に出た。これは西ベルリンで開催される第14回国際自治体連合会議に日本代表として出席したもので、アフリカやアジア各国も視察した。この旅行は、「政治の世界」を全力で走ってきた山崎にとって束の間の息抜きとなり、帰国後、その成果を『欧州東南アジアの印象』として一冊にまとめて公刊している。

1960年2月26日、県議会の第61回定例会が招集され、社会党の千葉民蔵・議員は3月4日の県議会における質問の中で、山崎知事の行動を次のように批判した。新知事山崎の行動を知りうる的を得た内容である。

「知事に対する綽名は“不在知事”“東京常駐知事”となっている。1年のうち170日以上は東京出張では青森県知事とはいえず、半分は代議士生活に身を投じているのではないかとの印象を受ける。部長や課長補佐クラスで間に合うものを、知事が走り回ることが間々あると聞いている。国の予算獲得ならば、県出身の国会議員が存在している。これと連絡して、これらの総括的力を発揮するのが知事の役目でないか。

時々の問題、何かキャッチ・フレーズ的な問題を追い回すことも必要だろうが、県政を正しく見る余裕がなく、腰が据わらないことになれば、これは決して軽い問題ではない。この際残任期間短しといえども、十二分に用心されて、県政に精進されんことを要望したい（『青森県議会史 自昭和35年～至昭和37年』〔青森県議会、1978年〕、21～22頁）。

② 知事再選

任期満了に伴う知事選挙が、1960年7月1日に行われた。今回の選挙は、山崎にとって二度目の知事選挙である。そこで、既に前年の1959年に出馬の意向を表明し、また自民党内にも再出馬に対して、これといった反対もなくすなりと公認された（前掲書『山崎伝』、230頁）。

知事選挙に立候補したのは、自民党公認の山崎岩男と社会党公認の淡谷悠蔵の二人のみで、選挙の結果は、山崎が29万5,198票を獲得、一方、淡谷は18万6,263票を獲得、その差は、10万8,939票で山崎の圧勝に終わった。山崎の勝因は、自民党の一本化もさることながら、なによりもこの4年間に於ける知事としての実績を県民が認めたということであろう。

『東奥年鑑 昭和35年版』は、知事選挙の特徴、勝因、および敗因を次のように分析している。

- 投票率は過去四回の知事選挙で最低で62.37%にとどまった。ちょうど国会で安保改定反対闘争、岸内閣退陣要求が続けられていた最中であり、知事選挙への関心盛り上がりも予想されたが、県下各地の立合演説会の盛況さにもかかわらず、地方ではさっぱりだった。
- 社会党県連は組織の力を動かし、安保改定阻止反対運動、自民党不信という好条件に恵まれて従来にない強力な運動を行った。だが、淡谷が初めての県一区という戦いを行ったため、津軽地帯では知られていない点があった、ことなどで全般的に伸び悩み、従来の最高得

票から4万票を伸ばしたにとどまった。

- 一方、自民党県連は一本で戦ったが、勝因は党組織よりもむしろ山崎知事が4年間培った実績と顔であり、山崎知事個人の力が大きかった。
- 安保改定反対という大きな国民運動的な嵐のなかにあつて社会党への支持層が増大することが予想されたものの、結果はその反対で、本県社会党の基盤の弱さをまざまざとみせつけ、保守の牙城といわれる本県の実情が再現された形である（『東奥年鑑 昭和35年版』〔東奥日報社、1960年〕、46頁）。

要するに、これまでの選挙を通じて、青森県は全国でも保守の絶対地盤という土地柄であり、山崎の勝因は、社会党が必死の攻勢をかけたけにもかかわらず、この保守体制がくずれなかったことがまず挙げられる。また、山崎知事は過去4年間の県政を通じて目立った功績もない代わり米内山義一郎・社会党県連会長が「山崎県政を批判するのは、何も仕事をしてないから、お寺の柱に上がるくらい手がかりがない」と語ったように、これといった失敗もなかった点も有利に作用した（『東奥日報』1960年7月2日）。

県議会の第69回定例会は、1962年2月28日に開催され、会期は3月26日までの27日間と決定、提出された案件は210億円3千万円と県政始まって以来の大型予算をはじめとする予算関係が30件、条例改正28件、新設される十和田、五所川原両工業高校、三沢商業高校など5件で、これについて山崎知事から提案理由が説明され、3月7日から一般質問が開始された。

『東奥日報』紙は、社説「進歩した知事説明」の中で、極めて珍しいことに、山崎知事が提案した議案の説明を高く評価している。いわく「これまでの提案説明は、予算案に盛られた数字のら列ないしはその他議案の形式的な、しかも抽象的な説明に終始していた。これに対して

今回は県経済の現状分析や将来の見通しについての説明にほぼ三分の一をさいている。知事がこんどとくに詳細に説明したのは、いろいろな理由があるにしても、結果的には県民の県政に対する関心を深めるためにも、あるいは一般質問の質的向上のためにも結構なことだと思う」(『東奥日報』1962年3月1日)。

③ 知事辞任

山崎岩男・知事は、1960年7月の知事選挙で二度目の県民の支持を得て、赤字財政の解消、高校急増対策を中心に県政を促進してきた。しかし、県議会第69回定例会が開催中の1962年3月23日、山崎は吐血し、直ちに、県立病院で胃の切除を行った。知事の病名は胃潰瘍だと公表された。しかし、実際には「門脈圧高血圧症」であり、5月18日退院し、自宅と治療を続けていた。だが、翌年、1963年1月8日、山崎知事は再び吐血、これ以上知事職に留まることは出来ないと判断、1月18日、横山武夫・副知事を通じて辞表を提出、任期半ばにして辞任することになった(前掲書、『青森県議会史 自昭和35年～至昭和37年』、913頁)。

1957(昭和31)年7月に知事就任以来連続二期6年6ヵ月間務めて、山崎県政に終止符が打たれることになった。苦悩の果てに意を決した山崎は、1月26日に開かれた県議会第54回臨時会で辞表が承認された。県議会で辞任の挨拶は横山副知事が代理として述べ、これに対して、自民党を代表した北村正哉・議員が在任中の功績を称えた送別演説を行った。辞任の挨拶の中心は次の通りである。

「……顧みれば昭和31年7月、知事に就任以来今日まで6年半、私は県政運営の基本線といったしまして、一つ、県民に対して経済生活の基盤を固めること。二つ、次世代をになう青少年の健全なる教育の振興をはかること。三つ、社会福祉施設の充実を講ずること―の三点を掲げ、

県政振興のため鋭意努力して参ったのでありますが、幸いにして経済界の好況、政府の財源措置などもありまして、昭和36年度限りをもって財政再建準用団体を返上して健全財政を樹立することができることになりました。

一方において県産業経済基盤の整備充実、高校生急増対策として高等学校の新增設、各種福祉施設の拡充整備等ある程度の成果をおさめることが出来、いささか御奉公申し上げることが出来たことは私の最も喜びとするところであります。特に私の多年の念願でありました下北砂鉄工場の建設が1月16日、(経済)企画庁の内示によって本ざまりとなりましたことは、県議会議員並びに県民各位の御支援と御協力のたまものであると心から御礼申し上げる次第であります……」(前掲書『山崎伝』、248-249頁)。

これを受けて、北村正哉・県議員は、山崎の知事退任にあたり送別の演説を行った。北村議員は、下北の砂鉄開発事業の見通しがついたのを花道に、辞任を決意するに至った山崎知事の心境を語り、その上で、財政再建、県庁舎の新築、および高校生急増対策など任中の功績を称えた。次いで、県議会は発議第二号で、山崎知事に対する感謝状を上程、全回一致で可決した。

「知事山崎岩男殿は昭和31年7月、県民の与望を担って当選、就任以来6年6ヵ月にわたり在任、先ず財政の確立に全力を挙げ、昭和36年度をもって計画どおり累積せる赤字の解消を実現して県政の基盤を強化し、また県政三大方針として民政の安定、教育の振興、社会福祉の充実を公表し、道路の整備、テンサイ工場の誘致、青森、弘前、五所川原、十和田、三沢の各市に高校を新設する高校急増対策に善処する等、着々とその実績を挙げつつあることは県民ひとしく認めるところである。

特に多年悲願として政治生命をかけた砂鉄の工業化も東北開発会社の誘致で実現する運びと

なり、下北開発の拠点はもちろん、本県第二次産業開発の端緒を拓く等県政発展のためにつくされた功績は極めて大なるものがある。

今回病気のため任期半ばにして退職することは県政将来のためまことに遺憾である。ここに県議会は満場一致をもって在職中の大きな功績を称え感謝の意を表する。右決議する。昭和38年1月26日「青森県議会」（前掲書、『青森県議会史 自昭和38年～至昭和41年』、21頁）。

その山崎は、1964年11月22日に死去する。カゼのため県立青森病院に入院中であったが、その後、病状が悪化、持病の門脈高血圧症に急性肺炎を併発、帰らぬ人となった。実は、山崎はかなり健康を取り戻しており、1965年6月に予定されている参院地方区から出馬することを自民党県連から公認されていたのだ。このため各種の会合にも進んで出席し、11月5日の青森空港開港式にも臨席した。だが、その際カゼをこじらせて9日から入院、手当を受けていた（『東奥日報』1964年11月23日〔夕〕）。松岡孝一著『一地方記者の記録～東奥日報とともに半世紀～』の中の「官選知事と民選知事―座談100年史」で、A氏は「山崎の死を早めたものは、むつ製鉄と工専だと思う」と発言しているが、山崎の知事としてのエネルギーな政治活動から判断して、この発言は遠からず当たっている、と思われる（松岡孝一、前掲書『一地方記者の記録～東奥日報とともに半世紀～』、73頁）。

山崎が23日朝に亡くなったことは、県政界や関係者に大きなショックを与えたのはいうまでもない。竹内俊吉知事は、23日昼、次のような「知事談話」を発表している。

「前知事山崎岩男君の死去はまことに残念ではない。政治家としては山崎君は政策型というよりも実行型でよく仕事をされた。県政においては財政立て直しに苦心され、これを確立し、電気復元問題ではスポーツセンターを実現、県

庁舎新築、高校急増対策、むつ製鉄事業推進など長く記録されるべき記録治績をあげられた。“誠実で馬力の強い山崎さん”は本県政界のホープとして来年の参院選には自民党公認がすでに決定し、当選が疑いなく再び政治で活躍を待たれていたのに全く残念である」（『東奥日報』1964年11月24日）。

後年、竹内知事は畏友淡谷悠蔵との対談の中で、山崎から「私は健康上から、むつ製鉄の事業認可を花道に知事を辞めたい」といわれ、経済企画庁の大堀次官と掛け合い、「結局、（同16日）私の情報として認可内示の見通しのような電報を山崎に打った。山崎はその電報を見て辞任を決意したのですよ」、と山崎退陣の内幕を披露している（『青森に生きる―竹内俊吉・淡谷悠蔵対談集』〔毎日新聞青森支局、1981年〕、312-313頁）。

既述のように、山崎は学生時代に結婚し、生涯イマ夫人を愛し続けた。一般的に、政治家は艶聞と黒いうわさが絶えないものだ。だが、山崎は選挙では常に法定費用ギリギリの線での“綱渡り選挙”であったし、また熱烈な愛妻ぶりで艶聞には縁がなかった。山崎は1959年外遊した時には、留守宅のイマ夫人に7通もの手紙を送っているほどだ。そのイマ夫人は、「夫は商業教諭時代の6年間を除くと、あとは亡くなるまで政治生活でした。選挙に明け選挙に暮れた生活であり“生活即政治”“選挙即生活”であったわけです。夫はどんな大変と思われる選挙の時でも“俺の舌が健全なうちは大丈夫”とっておりました。私はあまり心配せずに、ただ夫についていけばよかったのです」、と語っている（前掲書、『山崎伝』、269頁）。

④ 地方財政再建促進特別措置法（以下、地財再建法と略す）

山崎は知事に就任した当初、津島県政を踏襲するという表看板を掲げて県の運営に乗り出した一方で、重要事項に関してはかなり手直しを

行っている。例えば、津島前知事の命運を決した「中間給与条例」を1956年11月の県議会の第47回定例会であっさりと廃止したし、また長谷川総務部長を更迭して東京事務所長に据えたのも、その一例であった。なお、ここでの中間給与とは、県職員の給与表に中間段階を設けて、定期昇給を二分の一に押さえるものである（藤本一美、前掲書『現代青森県の政治（上）1945～1969年』、115頁）。

しかし、何といても、津島県政を修正した最大のものは、県財政の自主再建方針を放棄して、「地財再建法」の準用に踏みきったことだろう。1957年3月、国会で東北開発促進法、東北開発株式会社法、および北海道開発公庫法などの、いわゆる「東北開発三法」が成立し、1957年度から政府による本格的な開発促進計画が実施されることになった。ただ、青森県の場合、津島前知事時代のように、自主的に県財政を再建することになれば、「地財再建法」を適用する県に対して、高率補助を適用する指定事業の範囲内に限って同様の補助措置を定めている関係上、その恩典に浴しないことになる。そのため、山崎知事は3月の“予算議会”で一旦決定した自主再建計画を水に流し、11月の定例会に改めて、「再建準用団体」としての再建計画に切り替えて提案、県議会もまた事情を勘案してやむなきと認め、これを異議なく承認した（『東奥年鑑 昭和32年版』〔東奥日報社、1957年〕、30頁、その詳しい経緯については、古瀬兵次『議員活動三十五年』〔三国印刷、1986年〕、374～375頁などを参照されたい）。

⑤ むつ製鉄問題

山崎が知事として政治生命をかけたのが、むつ市への製鉄工場の誘致に他ならない。県南から下北にかけて埋蔵されている砂鉄を原料に、一大精錬所を建設しようという計画であった（『人生80年－前青森県知事北村正哉の軌跡』〔アクセス

21世紀出版、2000年〕、219～220頁）。

周知のように、下北地域は、先の戦争以前にもこの地で産出される砂鉄を精錬する事業所（日本特殊鋼管）が立地、戦後は東北砂鉄鋼業が立地、さらに1954年（昭和29年）の通産省未利用鉄資源調査委員会で、県内で国内全体の約4割、下北地域だけで国内全体の約2割という砂鉄埋蔵量が報告され、その有効活用を目指した。1957年（昭和32年）に東北開発社が再発足した際に選定された5大基幹事業の一つに砂鉄利用工業を掲げられ、1958年（昭和33年）から調査活動を開始、下北地区に銑鋼一貫方式による特殊鋼工場の建設を目指した。その後、砂鉄鉱区の取得、精錬方式の決定等を経て1962年（昭和37年）7月、三菱グループ（三菱鉱業・三菱製鋼・三菱鋼材・東北砂鉄鋼業〔昭和32年より三菱鉱業の傘下となる〕）との提携覚書が締結され、1963年（昭和38年）3月に総理大臣の認可を受けて、同年4月、資本金5億円の「むつ製鉄株式会社」が設立された。本社は東京都千代田区大手町に置かれ、事業所は青森県むつ市に設置することになった。

だが、1961年（昭和36年）をピークにして砂鉄銑の需要は減り始め、それに代わって高炉銑による安価で良質の鋼が出回り始めていた。このような情勢の変化もあって数次に渡り実施計画が見直されたが、いずれも企業化は困難であるとして1964年（昭和39年）11月三菱グループが撤退を表明、その後1965年（昭和40年）4月むつ製鉄事業推進断念の閣議了解がなされ、むつ製鉄は解散することになった（『新聞記事に見る青森県日記100年史』〔東奥日報社、1978年〕、827～828頁）。

⑥ 工専誘致合戦

1961年6月、学校教育法の一部改正で、五年制の国立工業専門学校（以下、“工専”と略す）の設置が決まり、文部省の意向により、各府県

に工専一校が設置されることになった。工専の青森県誘致については、青森市と八戸市の両市がともに譲らず、県議会内でも青森支持派と八戸支持派とに分かれて紛糾した。誘致合戦も山崎知事を悩ませたものの一つである。最初、八戸市が名乗りを挙げ、山崎も乞われて「誘致期成同盟」の会長を引き受けた。ところが青森市も名乗りを挙げ、県議会を巻き込んで陳情合戦が展開された。このため8月23日、荒木萬壽夫・文部大臣は、山崎知事に対して「同一県内で紛争を起こしている所は保留になろう」と言明、本県への工専誘致が危惧された。

結果的に青森県の場合、当初開設を予定されていた1962（昭和37）年度開校の12校からはずされてしまい、青森と八戸の対立は、いわゆる“津軽”と“南部”という旧藩時代以来の対抗心を改めて高めることになり、県政の空白状態を生み出した。しかしその後、山崎はこれに屈せず、自民党県連会長の森田会長らと共に、持ち前の“政治力”を駆使して自民党三役に働きかけ、工業都市など立地条件が整っていた八戸市への1963年度設置の確約をさせたのである（『東奥年鑑 昭和37年版』〔東奥日報社、1962年〕、36頁）。

⑦ 県議会選挙区問題

1963年4月の地方統一選に絡む県議会の定数、選挙区の改正は、1962年11月の第53回臨時会に提案された。しかし、県議員の定数は1名増員となることからもめた。提案に先立って、山崎は自民党両派議員団に対して、現行選挙区案と東通一むつ、平内―青森の合区案の二つを示し、議員団の意向を聞いた。自民党議員団は両派合同議員総会を開いて協議したものの、直接関係のある東青議員団と下北議員団とが激しく対立、結局、山崎は現行選挙区案（青森、八戸両市1増、むつ市1減）を提出したが、議会は初日から紛糾した。

会期は28日までの3日間に過ぎず、最終日の28日、自民クラブが知事提案に反対、合区案を修正動議として提出、そのため会期を1日延長して“暁の議会”となった。しかし、修正案は15票対25票で否決され、山崎が提出した現行選挙区案が26票対13票で可決されたのである（『東奥年鑑 昭和38年版』〔東奥日報社、1963年〕、98頁）。

『東奥日報』紙は、「話題をつく」と題した記者対談の中で、選挙区改定の問題を次のように総括して山崎知事の政治姿勢を批判する。「（山崎）知事はもっと議会に強くなっていい。今度の選挙区問題だって、知事が責任をもって提案したらある程度混乱が避けられたであろう。与党の意見を尊重するのはいいが、まるで提案権まで与党にあずけた格好だ。やはり責任を持つところはもっと毅然たる態度で臨むべきだ」（『東奥日報』1962年12月1日）。

山崎知事の前の津島県政を特色づけたのは、財政的欠乏であり、国の地方財政への制度的改正がなくては、意欲だけあってもどうならない時代であった。ただ、例えば、八戸市の三角洲地帯造成は津島県政下で着手したもので、これもある意味で新産都市指定への一つの布石となった。この後を受けて山崎県政は、知事選緒戦の時から「東北開発」を一枚看板のように強調した。たが一方で、開発関係法の乱発が総合的な地域開発をかえって停滞させてしまった結果となったことも否めない。実際、青森県の場合に当てはめて見れば、東北開発に基づく「むつ製鉄」「八戸新産」とが重なり合い、新旧の開発計画がほぼ同時期に押し寄せてきた事情も散見される。その結果、東北開発を叫んだ山崎県政が非運の退陣で終わると同時に、「むつ製鉄」も消滅した、のである（前掲書、『青森県議会史 自昭和38年～至昭和41年』、5～6頁）。

6. おわりにー

「政治家」山崎岩男とその評価

一般に、前知事津島の政治手法＝リーダーシップの特色は「理づめの合理的」タイプであり、それに対して、山崎知事の政治手法＝リーダーシップの特色は、「積極的な行動派」タイプのそれである、といわれる（秋元良治『知事交渉15年－対決の旋律』〔北の街社、1987年〕、藤本一美「戦後青森県の政治と選挙 1945年～1969年」『日本臨床政治学会 2015年東京大会』〔2015年4月〕提出ペーパー）。

本論でも指摘したように、山崎は政治家として、参議院選でも知事選でも党公認を得られなかったこともあった。また、保守合同以前の旧自由党時代の仲間からは、「山崎の狙いは代議士か、参議院か、それとも知事か」という具合に、何にでも出馬宣言する山崎に批判の声も聞かれた（松岡孝一、前掲書『一地方記者の記録～東奥日報とともに半世紀～』、252頁）。

これを受けて、東奥日報記者の松岡孝一は次のように山崎の行動を批判する。「山崎は、忙しく選挙の立候補のために動きまわってろくに政策など身につける時間もなかったろう。五期の代議士経験はあっても“知事”としての県政構想など練る暇もなかった。……町村合併問題がこじれてもめた。山崎の態度は二転、三転した。……走りながら考えるという意味でも“マラソン知事”の反面もあったのである。とかく早とちりである」（同上、252～253頁）。

一方、県の幹部として山崎知事に仕えた山内善郎・元副知事は、山崎は「涙もろく行動力は抜群」と述べて、次のように山崎を評価する。「学生時代（中央大学）、箱根駅伝の選手として鳴らした山崎知事は行動力抜群。私が仕えた4知事のなかで運動量はピカーだった。派手さはないが、現木村守男知事に負けないほど足を動かした。“予算獲得のため国に一押ししてくれ

ませんか”という部下の頼みにも嫌な顔を見せず、すぐに霞が関に発してくれた。そして人情家。涙もろかった。山崎県政のほとんどを私は開拓課長として働いたが、恵まれない入植者のため、知事は思い切った予算措置を講じた」。「その反面、大変なかんしゃく持ちで、頭にくると、顔を紅潮させ、床を踏んで部下をしっかりとつけた」（山内善郎、前掲書『回想 県政50年』、49頁）。

また山内は人事について、次のように津島と山崎の相違を述べている。「人事については“動の津島”に対して“静の山崎”だった。津島さんの特徴は抜擢人事。思い切った人材登用をする反面、不祥事などが発覚すると、すぐに降格した。……逆に山崎さんは人事をほとんどいじらない。……通常、部長、課長級の人事の幹部クラスの人事には知事の意向が反映されるが、山崎さんはノータッチだった」（同上、57～58頁）。

さらに、青森県教員組合の書記長として山崎知事と交渉でやりのあった、秋元良治は、“間がとれない山崎知事交渉”と記して、次のように山崎が取った手法の特徴を指摘している。「雄弁家として定評を博し、裸一貫から鍛えられてきた庶民派の政治家と自負している山崎知事との交渉は、組合側からの質問や追及と、それに対しての知事の答弁とが間断なく相互に行われ、まことにニギヤカにして活気のある雰囲気で行うのだ」。「津島知事交渉を“静かな団体交渉”と規定したとすれば、山崎知事交渉は、まさに“喧噪たる団体交渉”だということになる。……その意味では、山崎知事との場合は、“間のない動きばかりの団体交渉”ということになる」「山崎知事の人柄のせいでもあろうが、私をはじめとして組合側から、かなり辛辣にズケズケとモノを申しても別に怒ることもせず、例の熱弁で答えてくれるのだ。だから、

私が津島、山崎、竹内の三大にわたった15年間に、なんの気がねも遠慮もせずに、言いたいことを喋りまくって交渉できたのは、山崎知事とであった」（秋元良治、前掲書『知事交渉15年－対決の旋律』、164～166頁）。

付言しておくならば、秋元は「山崎知事は組合との交渉で、答弁しているうちに熱をおび、だんだんと大声で演説口調となり、あげくの果てにテーブルをドンと叩くのは、知事になってからではなく、知事就任に先立つ30余年前の大正8年、青森商業の教諭となって教壇に立ったときからの一八番（おはこ）であった」と、述べている（同上、168頁）。

次に、『山崎岩男伝』に追想記を寄せた人達の山崎の人物像を述べておこう。伝記に寄せる文章は大抵その人物を褒め称えるが常だとはいえ、一面の真実もまた含まれていることも否定できない。山崎のことを同じ自民党の衆議院議員・田沢吉郎は、「先生は一言でいえば、明朗で行動的で責任感の強い政治家であり、人間的には豪快で人情家で義理固い人であったように思います」、と述べている（前掲書『山崎伝』、18頁）。また、山崎と選挙戦を演じた社会党の淡谷悠蔵は「山崎岩男氏はスポーツマンであったが特にサバサバしていて、こだわる風もなく、闘志だけはいつも凛凛としていた。・・・山崎氏は例によって、カラッと明るい喜び方をしていた。悔しがっても嬉しがっても陰影のない明るい悔しがり喜び方をするのは、山崎氏の持って生まれた人柄である」、と評している（同上、25、27頁）。

ただ、中央大学で一緒に陸上選手である、亀谷デパートの社長・南勘二は次のように「政治家」山崎を見ていた興味深い。すなわち、「山崎さんは人から選挙の神様といわれたが、神様でも何でもなし。商業学校における人望高い教師であったこと、持って生まれた正義感と雄弁

の力がプラスされて多くの有権者の共鳴を喚起したのである。言えかえれば卓越した雄弁と公正正大な行動が、時代の先駆者として大きく注目され、期待されて“票”として固まるに至ったものである。」「しかし、山崎さんといえども人間である。私たちのような商売をやっている者の目から見ると実に頑固なほど自己主張を変えない。それはそれとしてよからうが、人間として沢山の人のリーダーとなって生きていくにはもう少し如才なく振るまったらどうかとこれまでもしばしば考えたことは否めない」（同上、33頁、南勘二は青商OBで、山崎の県議選、衆議院選への出馬を通じて、選挙戦で采配を振るい、その指揮下で、青商時代の教え子が恩師のために応援演説や票集めに走り回った〔前掲書『風雪の人脈 第一部・政界編』、78頁〕）。

松岡孝一著『一地方記者の記録～東奥日報とともに半世紀～』『官選知事と民選知事―“座談100年史”（1967年9月19日）の中に、“民選知事・下・高度経済成長に乗った山崎”という箇所がある。その中で、以下のように山崎県政の功罪を問うている。本稿の結論に代えて、最後に紹介しておきたい。

「A ところで山崎の功罪をどうみるか。B 一期目は非常によかった。いわゆる高度経済成長の始まった年だ。C それに金があった。津島がためた財源がかなりあった。B 経済も上がり坂。それに津島の遺産があった。津島が部課長の旅費を一等から二等に下げて緊縮した結果、山崎の時代に現れてきた。そういう点で山崎は非常に恵まれていた。C 恵まれすぎたから仕事にあと先の勘がなく飛びついたきらいがある。それがいま出てきた。A 山崎の遺産だ、危険だといわれる青森空港も問題。だめになったフジ製糖、むつ製鉄。いまの知事はそういう点で後始末の段階ともいえる。結果論だけれども山崎の時代にスタートしたのはあまりいい方向に向かっていないということがいえる。C 最大

の話題は管理局と工専だ。A（国鉄青森）管理局を誘致するとしゃべり出したのは代議士時代の山崎だ。これが奏功しないで落選の原因ともなった。30年の総選挙で6番目に落ちた。……
A 山崎は津島と違って人事にはテンダンだったし、県議会工作も手のこんだことはしなかった。ガラス張りのだれにでもわかるやり方だったが、それがまた先見性を要求される指導者という角度から見るとマイナスという評価も出てこよう」（松岡孝一、前掲書『一地方記者の記録～東奥日報とともに半世紀～』、69～71頁）。

いずれにせよ、山崎は「政治家」として仕事をするのに駆け引きがなく、万事正攻法だった。ともかく、一旦方針が決まれば走り出す。政治街道というゴールなき道程を、スピードを落としたり途中で休んだりすることなくひたすら走り続けた。その山崎は有権者に対して、政治家としての期待感を与えた。それは政治に対する“希望”でもあった。ともかく山崎といえば、情熱に燃えた火の玉のような正義漢だったという印象を有権者に示した。つまり、それだけ魅力のある政治家としてクローズアップされたわけであって、その意味で、山崎岩男は本県の選挙史および政治史に大きな光彩を放ったエネルギーに満ち溢れた政治家であった、と結論づけておきたい。

〈参考文献〉

- ・『山崎岩男伝〔マラソン知事追想記〕』（山崎岩男伝刊行委員会、1980年）
- ・『青森に生きる―竹内俊吉・淡谷悠蔵対談集』（毎日新聞青森支局、1981年）
- ・『風雪の人脈、第一部 政界編』（朝日新聞青森支局、1983年）
- ・秋元良治『知事交渉15年―対決の旋律』（北の街社、1987年）
- ・松岡孝一『一地方記者の記録～東奥日報とともに半世紀～』（東奥日報社、2000年）
- ・古瀬兵次『議員活動三十五年』（三国印刷、1986年）
- ・山内善郎『回想 県政50年―前青森県副知事 山内善郎』（北の街社、1997年）
- ・『人生80年―前青森県知事北村正哉の軌跡』（アクセス21世紀出版、2000年）
- ・木村良一『検証 戦後青森県衆議院議員選挙』（北方新社、1989年）
- ・木村良一『青森県知事選挙』（北方新社、1998年）
- ・藤本一美『現代青森県の政治（上）1945～1969年』（志學社、2015年）
- ・藤本一美「青森県の民選知事① 津島文治・知事（1947～1956年）」『専修大学社会科学年報、第49号』（専修大学・社会科学研究所、2015年3月）
- ・藤本一美「戦後青森県の政治と選挙 1945年～1969年」『日本臨床政治学会 2015年東京大会』（2015年4月）提出ペーパー。
- ・『青森県議会史、自昭和28年～至昭和34年』（青森県議会、1960年）
- ・『青森県議会史 自昭和35年～至昭和37年』（青森県議会、1978年）
- ・『青森県議会史、自昭和38年～至昭和41年』（青森県議会、1983年）
- ・『東奥年鑑 昭和32年版』（東奥日報社、1957年）
- ・『東奥年鑑 昭和35年版』（東奥日報社、1960年）
- ・『東奥年鑑 昭和37年版』（東奥日報社、1962年）
- ・『東奥年鑑 昭和38年版』（東奥日報社、1963年）
- ・『青森県人名事典』（東奥日報社、2002年）
- ・『新聞記事に見る青森県日記100年史』（東奥日報社、1978年）
- ・『東奥日報』各紙
- ・『陸奥新報』各紙